The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第五章　デザインの東西交流
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 193-195
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90146
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

遣欧米使節団による「Patent Office」や万国博覧会などの見学体験が参照されていたことは見落とせない。この間の事情を含めた日本における近現代ミュージアムの沿革については東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』（同館、一九七三年）が基本文献となる。

*5 たとえばつぎのような諸研究。北澤憲昭『眼の神殿――「美術」受容史ノート』（美術出版社、一九八九年＝ブリュッケ、二〇一〇年）、佐藤道信『〈日本美術〉誕生――近代日本の「ことば」と戦略』（講談社、一九九六年）。

*6 その代表的なものとして「世紀の祭典 万国博覧会の美術」（二〇〇四～二〇〇五年、東京国立博物館、大阪市立美術館、名古屋市博物館を巡回）が挙げられる。

*7 これについては下記を参照。工藤健志「「ロボット」をめぐる断想」ロボットと美術展実行委員会編『ロボットと美術　機械×身体のビジュアルイメージ』（講談社、二〇一〇年）一三六～一三九頁。

*8 展覧会出品資料からこれらを概観すると、初期のものには「宇宙人の手先となって人間を攻撃するロボット兵器」といった恐ろしい存在が頻出するが、大阪万博（一九七〇年）の前後から「人間とともに暮らし、人間の生活を助けるロボット」といった協調的な存在へと変化していくのがよくわかる。

*9 ただしこれらについては展覧会での提示には至らず、下記カタログテキストにおいて問題提起がなされた。川西由里「機械の女性たち――ロボットの性別をめぐって」ロボットと美術展実行委員会編前掲書一三二～一三五頁。

*10 このことについては折しも二〇〇六年末に実験サービスとしてスタートした「ニコニコ動画」のプラットフォーム特性が大きく寄与している。詳細は拙稿「人間とロボットの間に「不気味の谷」はあるのだろうか？」ロボットと美術展実行委員会編前掲書一四〇～一四三頁を参照のこと。

第五章　デザインの東西交流

デザインの東西交流

二〇〇一年に出版された藤田治彦編集による『国際デザイン史―日本の意匠と東西交流』は、欧米各国と日本とのデザイン史研究者が一冊は持っておくべき本にちがいない。五六の論説文をおさめており、今日でもデザイン史研究者が一冊は持っておくべき本にちがいない。二〇〇二年に意匠学会賞を受賞している。この本の徹底ぶりは目次をみれば明らかである。イギリス・アメリカ・ドイツ・オーストリア・イタリア・フランス・ベルギー・オランダ・ロシア・スイス・東欧諸国・北欧諸国というように章が並ぶ。近年学術分野では「インターナショナル」の語にかわって「トランスカルチュラル」の語がよく使用されるようになった。すなわち、国民国家の枠組みにしばられずに、民族固有の文化という神話にとらわれずに、文化の移動にともなう文化の変容にもっと注目せよという要請である。それはたしかに用語のうえでも顕著になってきているが、こうした関心はすでにあったし『国際デザイン史』のうちにもみられる。この本の表題のうちに「国際」の語があえて掲げられたのは「国」がまだ重要な時代をあつかっているからだと序文に書かれている。

（高安啓介）

参考文献

デザイン史フォーラム編『国際デザイン史―日本の意匠と東西交流』（思文閣出版、二〇〇一年）。